

「古墳時代の日本海側北限域の港湾性集落」

会期 4月26日(土) ▶ 9月7日(日)



はじめに

道正遺跡と岡崎遺跡が発見されたのは、2018 年に行った新潟中央環状線の建設に伴う試掘調査の時です。その後、2019～2021 年に両遺跡の本発掘調査を実施しました。2遺跡の調査面積は、延べ1万㎡を超えます。これは新潟市体育館の敷地面積(11,530 ㎡)とほぼ同じ広さであり、大規模な調査となりました。

調査では、平安時代・古墳時代・弥生時代・縄文時代の4時代を確認しました。調査終了後に、出土品や記録の整理を進め、2024 年 3 月に発掘調査報告書を刊行しました。

今回は、船の線刻土器が出土した古墳時代と弥生時代にテーマを絞って展示を企画しました。

遺跡の位置と環境

遺跡は、水田が広がる江南区割野地区に所在します。現在の海岸線から約 10km 内陸にある亀田砂丘の南西側の延長線上に遺跡は位置しています。砂丘は、現在の水田面から 1m以上も深く埋もれており、新潟平野の沈降に伴い埋没したものと推定されます。

標高は高い場所で海拔 0.2m、低い場所で-2.0mと、最大 2.2m の高低差があり、砂丘の縁辺部に位置することがうかがえます。潟湖や湿原が広がる中に、小さな島が浮かぶように見えたことでしょう。

古墳時代の道正遺跡の花粉や珪藻分析、樹種・種実同定などの自然科学分析から、遺跡周辺は沼沢湿地環境にあったと推定されています。また、ボーリングデータを用いた越後平野の復元古地理図を参考にすれば、遺跡周辺は広い範囲で湿原、湿地が広がるのに加え、海側では潟湖(ラグーン)、沼沢が存在する古環境だったと推測されます。

道正遺跡の線刻土器に描かれた大型の準構造船は、日本海から道正遺跡近辺の潟湖へと入ってきた船、ないしは船団を描いた可能性があります。

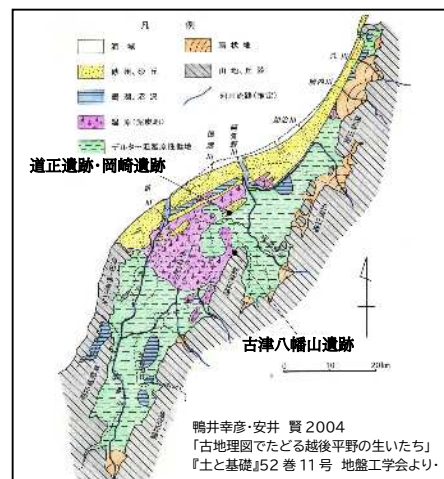
古墳時代の道正遺跡の概要

道正遺跡では古墳時代前期を中心に、一部古墳時代中期初頭の遺構や遺物が見つっています。河川または潟湖による低地を介在して西約100mに位置する岡崎遺跡では、断続的ながら弥生中期から古墳後期の遺物が出土しており、時期によって活動場所を変えていた可能性があります。

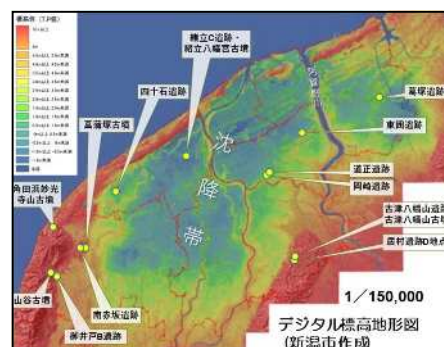
調査区内では大型の竪穴住居が存在する中央部が最も標高が高く、東西に向かって下降する地形となっています。調査区西端は谷のように落ち込んでおり、調査区東側では溝 SD234 や SD248 より東側には遺構が全く存在しないことから、集落と湿地域とを区画する溝の可能性が考えられます。集落域と湿地域とを画する溝は、港としての機能をも



遺跡の位置と周辺の景観



約 2000 年前の越後平野の古地理図



越後平野の地盤高図と企画展の主な遺跡

つ遺跡と考えられる西区赤塚の四十石遺跡でも確認されています。

砂丘は北東－南西方向に延びており、出土遺物や遺構の分布などから、古墳時代の集落は主に調査区外の南西方向に向かって広がっていたものと推定されます。

古墳時代の主な遺構・遺物

道正遺跡では竪穴建物が2棟確認されており(SI266・461)、どちらも一辺が9mを超す大型の建物であることから有力者の存在がうかがえます。また、南西域の調査区外へのびる溝(SD543)も建物に伴う周溝の可能性があります。

調査区西側では、砂丘の落ち際の緩斜面域において、土器集中遺構(SX233)が確認されました。この遺構では壺が多く出土していることや、船の線刻土器・外面に籠目の痕跡のある壺・壺形のミニチュア土器などの特殊な遺物が出土していることなどから、水辺の祭祀に関連した遺構と推測されます。



道正遺跡の遺構平面図(上)と上空からの写真(下 南から)



大型の竪穴建物全景(南西から)



大型の竪穴建物全景(SI461)



土器の集中遺構(SX233)



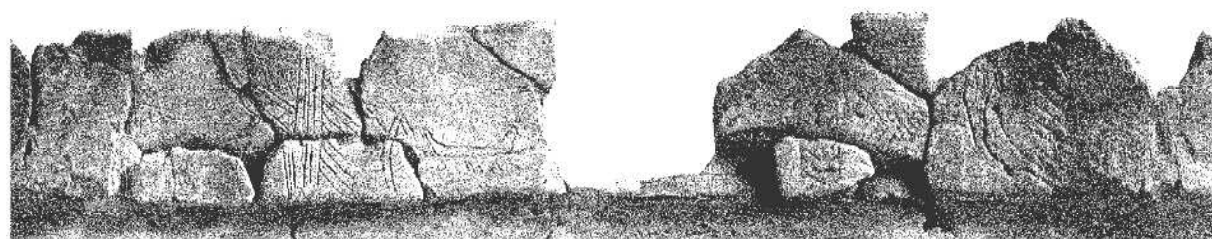
線刻土器の出土状況

道正遺跡の線刻土器

ヘラ状の工具などで土器の表面に線を刻んだ土器を線刻土器と呼んでいます。越後平野は古墳時代の線刻土器が分布する日本海側の北限にあたり、新潟市内では、道正遺跡で5点、北区葛塚遺跡で1点、西区緒立遺跡で3点の計9点が出土しています。

道正遺跡では2隻の準構造船などが描かれた線刻土器が発見されました。弥生・古墳時代の船の線刻土器は全国 50 遺跡ほどで出土しています。準構造船とは、丸木舟の上に板材をつけ足して深さ・高さを増したもので、丸木舟に比べ積載量や耐久性が増大した船です。この発見により、当時丸木舟だけではなく大型の準構造船がすでに周辺で利用されていたことが新たに判明しました。

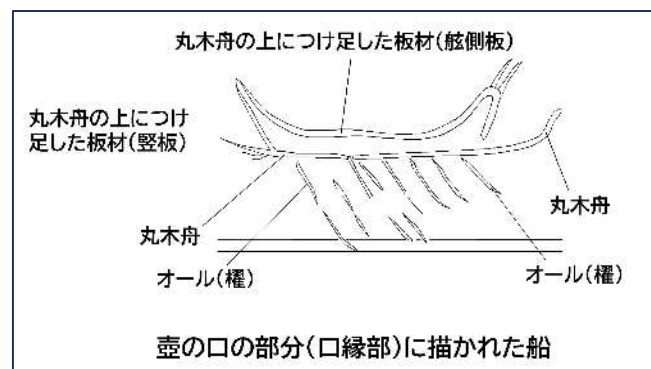
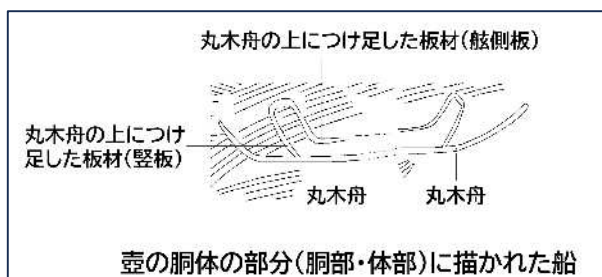
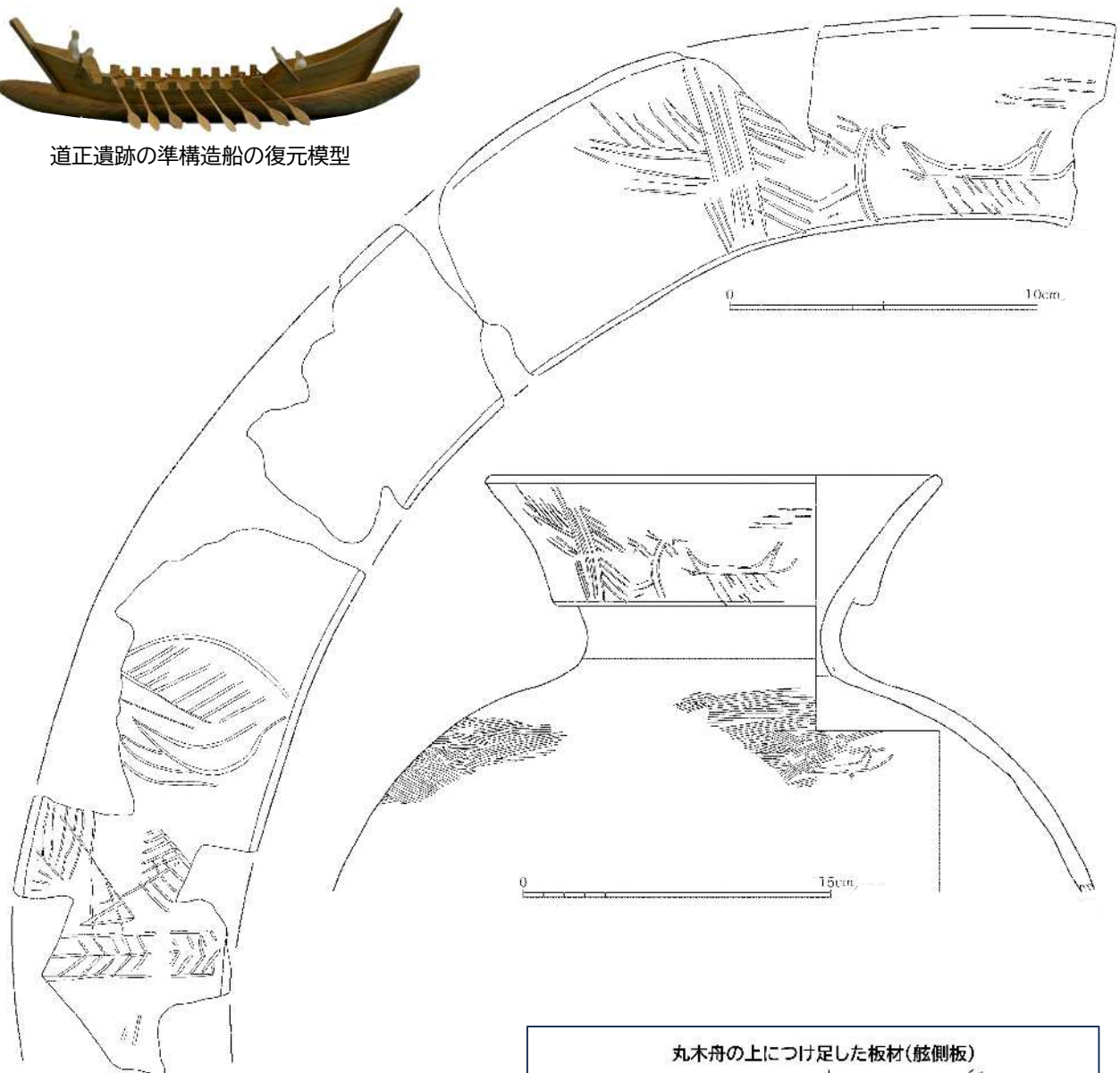
口縁部に描かれた船にはオールが8本描かれており、日本海や潟湖を航行した大型船と考えられます。オールの向きなどから、右方向に向かって航行していると考えます。体部に描かれた船にはオールの表現は無く、停泊する船の可能性があります。また、船以外にもさまざまな線刻がありますが、具体的に何を描いているのかははっきりしません。口縁部の船のすぐ左側の図像は鹿でしょうか。



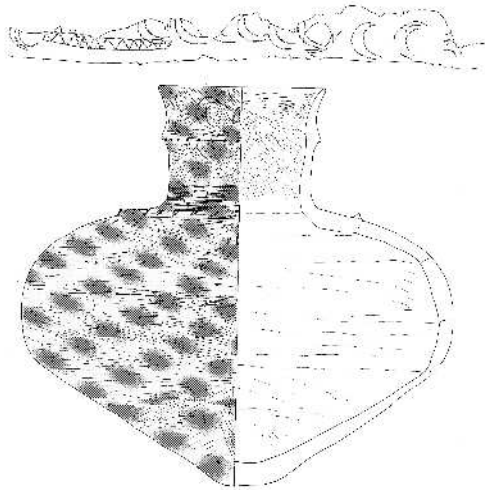
道正遺跡の船などが線刻された壺の口縁部の展開写真



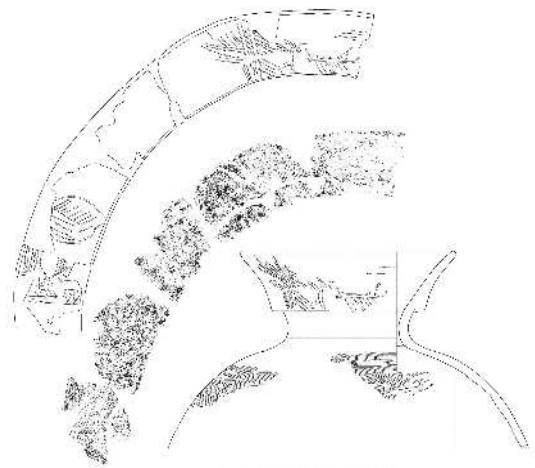
道正遺跡の準構造船の復元模型



道正遺跡の2隻の準構造船などが描かれた線刻土器の実測図(上)と、船の線刻部分の拡大図(中央)・写真(下)



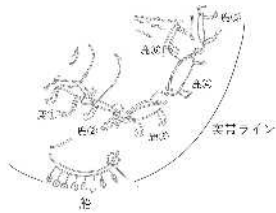
2 西念・南新保遺跡 (石川県)



1 道正遺跡 (新潟県)



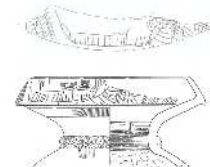
14 清水風遺跡 (奈良県)



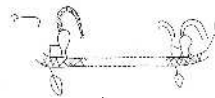
23 小阪合遺跡 (大阪府)



3 八幡林遺跡 (福島県)



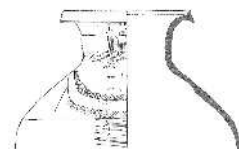
31 御領遺跡 (広島県)



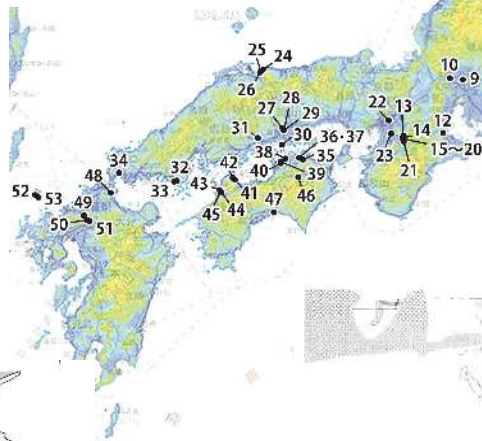
26 福吉角田遺跡 (鳥取県)



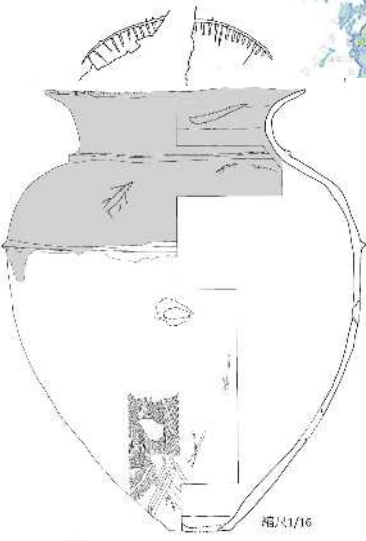
4 天神台遺跡 (千葉県)



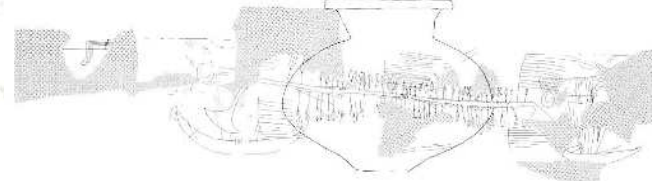
30 城遺跡 (岡山県)



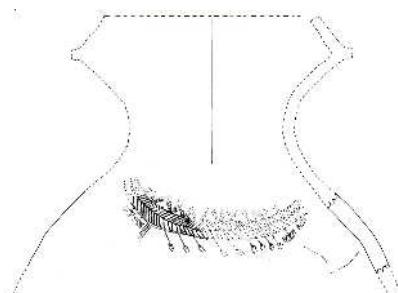
6 篠山遺跡 (埼玉県)



53 鹿の辻遺跡 (長崎県)



10 荒尾南遺跡 (岐阜県)



44 榑味高木遺跡 (愛媛県)



42 新谷森/前道跡 (愛媛県)

弥生時代・古墳時代における船の線刻土器出土遺跡(番号は5頁の一覧表に対応)と主な線刻土器
(53 以外の実測図の縮尺は 1/8)

弥生時代・古墳時代における船の線刻土器一覧(番号は4頁の分布図に対応)
(市原市教育委員会『市原市天神台遺跡Ⅲ』2023 を参考に一部加除のうえ作成)

No.	遺跡名	所在地	土器の種類	時期	出土遺構	備考
1	道正遺跡	新潟県新潟市	壺	弥生終末期～古墳初頭	土器集中分布範囲	
2	西念・南新保遺跡	石川県金沢市	壺	弥生後期末	溝(下層)	
3	八幡林遺跡	福島県南相馬市	甕	古墳前期前半	竪穴建物跡	
4	天神台遺跡	千葉県市原市	壺	弥生終末期(中台2式)	竪穴建物跡	
5	富士見台遺跡	千葉県富津市	土器	弥生後期	竪穴建物跡周辺	
6	篠山遺跡	埼玉県さいたま市	壺	古墳前期	方形周溝墓	
7	中道・岡台遺跡	埼玉県朝霞市	壺	弥生後期末～古墳初頭	竪穴建物跡	
8	三和町遺跡	静岡県浜松市	壺	弥生後期中葉～後葉	採集	
9	北道手遺跡	愛知県一宮市	土器	弥生中期	包含層	
10	荒尾南遺跡	岐阜県大垣市	壺	弥生後期(山中式)	方形周溝墓	
11	三雲町内採集	三重県松阪市	甕	古墳前期初頭	—	「町内採集」のため地図には未表示
12	小谷赤坂遺跡	三重県松阪市	壺	弥生後期	竪穴建物跡	
13	平等坊・岩室遺跡	奈良県天理市	土器	弥生中期		
14	清水風遺跡	奈良県天理市	壺	弥生中期(Ⅳ様式)	包含層	
15	唐古・鍵遺跡	奈良県磯城郡田原本町	壺	弥生中期(Ⅳ様式)	北方砂層	
16	唐古・鍵遺跡(第19次調査)	奈良県磯城郡田原本町	壺	弥生中期	中世大溝	
17	唐古・鍵遺跡(第37次調査)	奈良県磯城郡田原本町	壺	弥生中期	包含層	
18	唐古・鍵遺跡(第50次調査)	奈良県磯城郡田原本町	壺	弥生中期(Ⅲ様式)	区画溝	
19	唐古・鍵遺跡(第59次調査)	奈良県磯城郡田原本町	壺	弥生中期(Ⅲ様式)	区画溝	
20	唐古・鍵遺跡(第63次調査)	奈良県磯城郡田原本町	壺	弥生後期(Ⅴ様式)	区画溝	
21	坪井・大福遺跡	奈良県桜井市	壺	弥生中期	包含層	
22	東奈良遺跡	大阪府茨木市	壺	弥生	—	動物?
23	小阪合遺跡	大阪府八尾市	手あぶり形土器	弥生後期～古墳初頭	溝	
24	茶畑山道遺跡	鳥取県西伯郡大山町	土器	弥生中期	包含層	
25	妻木晩田遺跡	鳥取県西伯郡大山町	土器	弥生	遺構外	
26	稲吉角田遺跡	鳥取県米子市	土器	弥生中期	包含層	
27	高塚遺跡	岡山県岡山市	壺	弥生後期	竪穴建物跡	
28	津寺遺跡	岡山県岡山市	壺	古墳初頭	溝	
29	足守川加茂A遺跡	岡山県岡山市	壺	弥生後期後半	包含層	船?
30	城遺跡	岡山県倉敷市	壺	弥生中期後半	斜面	
31	御領遺跡	広島県福山市	壺	弥生後期後半	土坑	
32	明地遺跡	山口県熊毛郡田布施町	土器	弥生中期～後期	包含層	
33	開明遺跡	山口県熊毛郡田布施町	器台 or 壺	弥生後期	竪穴建物跡	
34	柳瀬遺跡	山口県下関市	器台	弥生後期～古墳初頭	旧河川	船?
35	鹿伏・中所遺跡	香川県木田郡三木町	壺	弥生後期	土器棺墓	船?
36	空港跡地遺跡	香川県高松市	壺	弥生後期	竪穴建物跡	船?
37	空港跡地遺跡	香川県高松市	壺	弥生後期	土坑	船?
38	川津東山田遺跡	香川県坂出市	壺	弥生後期～古墳初頭	自然流路	船?
39	九頭神遺跡	香川県善通寺市	壺	弥生後期～古墳初頭	溝	船?
40	旧練兵場遺跡	香川県善通寺市	高杯	弥生後期	溝	船? or 斧?
41	下経田遺跡	愛媛県今治市	壺	弥生後期終末～古墳初頭	自然流路	
42	新谷森ノ前遺跡	愛媛県今治市	鉢	弥生後期前半	谷部流路	
43	文京遺跡	愛媛県松山市	壺	弥生後期	竪穴建物跡	出土遺構は古墳後期
44	樽味高木遺跡	愛媛県松山市	壺	弥生後期	包含層	
45	枝松遺跡	愛媛県松山市	壺	弥生後期	溝	船?
46	貞光前田遺跡	徳島県美馬郡つるぎ町	壺	弥生後期	竪穴建物跡	船?
47	田村遺跡群	高知県南国市	壺	弥生後期	竪穴建物跡	船?
48	貫川遺跡	福岡県北九州市	壺	弥生終末～古墳時代初頭		
49	前田遺跡	福岡県太宰府市	壺	弥生後期		
50	津古2号墳	福岡県小郡市	壺	古墳前期	古墳	
51	乙隈遺跡	福岡県小郡市	壺	弥生終末期	竪穴建物跡	
52	カラカミ遺跡	長崎県壱岐市	壺	弥生後期		
53	原の辻遺跡	長崎県壱岐市	甕棺	弥生中期後半	墓	

※古墳時代中期の資料1点は除く

弥生・古墳時代の船の線刻土器

弥生時代・古墳時代における船の線刻土器の分布を見ると、いずれも低地部の遺跡から出土していることが分かります。また西日本に多く、中でも畿内や瀬戸内海、北九州に集中しています。一方、東日本には少なく、かつ限られた地域に点在している状況です。

道正遺跡の船の線刻土器は日本海側における北限の資料となります。日本海沿岸部での分布は希薄で、鳥取県、石川県、そして道正遺跡が位置する越後平野と距離をおいて分布しています。

太平洋側北限の資料は福島県南相馬市の八幡林遺跡で、今回お借りして展示しています。

越後平野の遺跡1 古津八幡山遺跡

国史跡の古津八幡山遺跡は、南北・東西文化の結節点であったことがよくわかる弥生時代の遺跡です。

北陸北東部と共通する土器のほか、会津方面の影響と考えられる東北系土器、さらには両方の特徴が合わさった土器(折衷土器)が同じくらいの割合で出土しているなど、日本海側と会津盆地とをつなぐ重要な拠点であったことがうかがえます。

また、日本海側における方形周溝墓の北限の遺跡であり、さらに高地性環濠集落や鉄器、ガラス製品の北限域にも位置します。最近の発掘調査で発見された東日本では珍しい複数埋葬の墓については、4基ある埋葬施設のうちの1基において、分布が西日本に集中する木槨構造の埋葬施設が採用されていることが分かり、日本海を経由して人や情報がピンポイントで入ってきていたことが分かりました。古津八幡山遺跡の有力者と西日本の有力者との間で、ネットワークが存在していたことが推測されます。

他方、古津八幡山遺跡では北海道のアオトラ石を石材に用いた石斧が出土しているほか、近くの居村C遺跡では東北北部系の土器が出土するなど、北方とのつながりもうかがえます。



古津八幡山遺跡全景(北東から)



古津八幡山遺跡出土の北陸系土器(上)と東北系土器(下)



4つの埋葬施設をもつ方形周溝墓(埋葬部1が木槨構造 古津八幡山遺跡)



古津八幡山遺跡出土の鉄剣・鉄鏃(左)とアオトラ石製の石斧(右)



木槨構造の埋葬施設の分布

越後平野の遺跡2 四十石遺跡

遺跡は越後平野の海岸寄りのほぼ中央に位置します。佐潟の北東にあり、現在は越後平野の沈降に伴い埋没してしまった砂丘に立地します。古墳時代の遺構が確認された標高は-1mから-1.5mで、海側へと砂丘が落ち込んでいく縁辺部にあたっていました。

古墳時代の遺構は、土坑や溝などが検出されました。溝は地形に沿って数本確認されました。溝の機能は不明ですが、低地部と集落とを区画する役割があったものと推測されます。



四十石遺跡の古墳時代の遺構(北東から)

古墳時代の遺物は前期と中期の土器が見つかりました。特に布留甕の影響を受けた甕の破片は 10 点を超え、県内で最多の出土数となっています。

さて、四十石遺跡では平安時代の遺物・遺構にはなりませんが、港を示す「津」と記された墨書土器や、総柱の倉庫群などが確認されています。古墳時代の遺跡周辺も低湿な環境であったと考えられ、平安時代と同様、日本海と内陸とをつなぐ水上交通の要衝であったことが推測され、そのような環境を背景に布留系の甕なども多く出土するものと思われます。



平安時代の倉庫群(人の立っているところが柱の穴・四十石遺跡)



四十石遺跡出土の布留系甕



津と書かれた墨書土器
(平安時代・四十石遺跡)

越後平野の遺跡3 菖蒲塚古墳

古墳時代の角田山麓には日本海側最北の前方後円墳である角田浜妙光寺山古墳や、日本海側最北の前方後方墳である山谷古墳が存在するなど、古墳文化の境界域ともいえる地域です。一方角田浜妙光寺山古墳が発見されるまで日本海側最北に位置する前方後円墳であった国史跡菖蒲塚古墳近くの南赤坂遺跡では、北海道に起源をもつ続縄文土器や、地元の土器と続縄文土器両方の特徴をもった折衷土器、毛皮などの皮なめしに使用した石器(スクレイパー)が出土するなど、北方から来た人が滞在した居留地と考えられています。

玉や鉄など南(西)方のモノや情報を求めて、日本海や河川などを南下しながら菖蒲塚古墳の被葬者など有力豪族がいる角田山麓へと北方から人がやってきたと考えられます。なお、南赤坂遺跡では山陰系の壺も出土しており、南北をつなぐ中継地としての役割があったことが示唆されます。



菖蒲塚古墳と南赤坂遺跡(南東から)



南赤坂遺跡出土の続縄文土器(左上)と折衷土器(左下)、
石器のスクレイパー(中央)、山陰系土器(右)

越後平野の遺跡4 角田浜妙光寺山古墳

角田浜妙光寺山古墳は、角田岬灯台付近の日本海に面した標高約 112mの丘陵上に立地します。古墳の全長は 49mで、立地や古墳の形などから、古墳時代前期の古墳と考えられます。

古墳は海からの眺望を意識してつくられており、古墳の上からは日本海や佐渡、海岸砂丘を望むことができます。また、海上からは灯台のようにランドマークとして視認することも可能です。

日本海の海上交通を掌握していた豪族の墓と考えられ、道正遺跡の線刻土器にあるような大型の準構造船などを駆使して、他の地域の豪族らと盛んに交流や交易、交渉を行っていた姿が想像されます。



角田浜妙光寺山古墳遠景(橋本博文氏撮影)

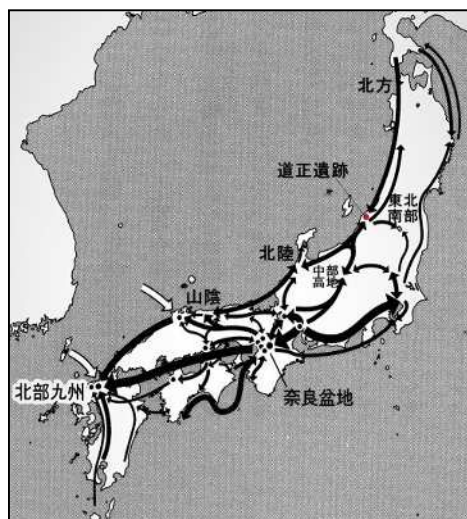
弥生・古墳時代の交流

弥生時代から古墳時代にかけては、交流や交易、さらには移住も含めて人やモノ、情報などが列島各地で活発に動いたことが考古資料から確認されています。この時期、自然環境も含めて社会が大きく変化していたことも指摘されています。

越後平野は弥生時代と古墳時代をつうじて、西(南)側の情報が伝わる日本海側最北の地である一方、北(東)方の情報が直接伝わる最も南(西)の地域でもありました。日本海側における日本列島のほぼ中央に位置する越後平野は、まさに人やモノ、情報が交差するクロスロード、結節点として重要な地域であったと考えられています。

道正遺跡でも他地域の特徴をもった外来系土器が多く出土しています。畿内から加賀などの北陸南西部にかけて見られる特徴をもつ甕(布留系甕)などが出土しています。また、県内2例目となる皮袋形土器も出土しています。布留系甕や皮袋形土器は、日本海ルートによる西方との関連を示す資料と推測されます。道正遺跡が日本海とつながる潟湖(ラグーン)周辺の港湾性集落であることが、多様な土器が出土する背景にあると考えられます。

なお、西区赤塚の埋没砂丘に立地する四十石遺跡でも布留甕を模倣した土器が多く出土しています。四十石遺跡は日本海から内陸へと入る際の港のような機能をもつ遺跡と考えられ、そのために道正遺跡と類似した特徴が見られるものと考えられます。



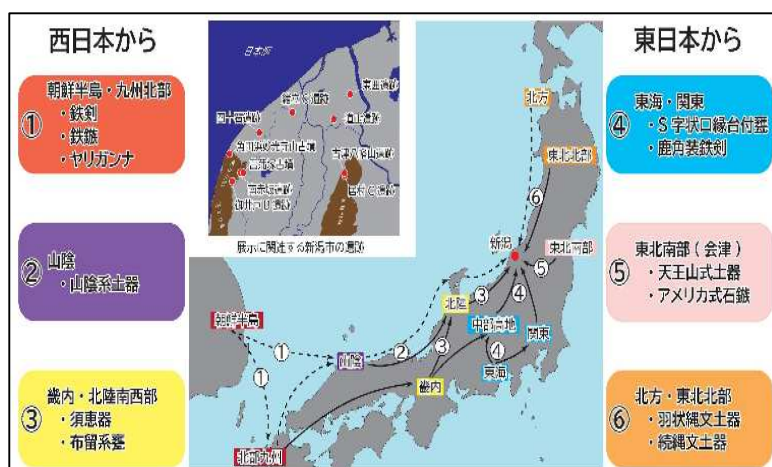
3世紀前半の人の動き
(松木武彦 2007『列島創世紀』小学館より・一部改変)



道正遺跡出土の布留系甕(左)と皮袋形土器(右)

おわりに

南(西)、北(東)の情報が交差するこの地域の重要性は、近年の発掘調査でより明らかになってきています。道正遺跡の線刻土器の発見によって、大型の準構造船が古墳分布圏の北限域である当地域においてすでに利用されていたことが判明したように、今後も新たな発見によって地域の歴史がより明らかになっていくことが期待されます。



弥生時代・古墳時代における新潟市域への人・モノ・情報の流れ概念図

主催・問い合わせ先

新潟市文化財センター TEL 025-378-0480
〒950-1122 新潟市西区木場 2748-1 FAX 025-378-0484
<https://www.city.niigata.lg.jp/kanko/bunka/sekishi/maibun/index.html>

開館時間／平日 午前9時～午後5時
土・日・祝日 午前10時～午後4時
休館日／月曜日(祝日の場合は翌日)、
祝日の翌日、5/8(木)

